

第十四回飛鳥山薪能

能楽鑑賞会

プログラム

演目

講談「羽衣」

能「羽衣」

2016年10月19日(水)

開場:午後1時30分 開演:午後2時00分
(終演予定午後3時30分頃)

主催:飛鳥山薪能実行委員会

共催:東京都北区、北区教育委員会、(公財)北区文化振興財団

助成:アーツカウンシル東京(公益財団法人東京都歴史文化財団)

会場:飛鳥山公園内野外舞台

※雨天時:北とびあ さくらホール

(JR京浜東北線・東京メトロ南北線 王子駅 徒歩5分)

後援:東京商工会議所北支部、東京王子ロータリークラブ

(公社)王子法人会、東京都北区町会・自治会連合会

北区商店街連合会、(一社)北産業連合会、北区謡曲連合会

(公社)東京青年会議所北区委員会、東京北ライオンズクラブ

協力:日本製紙総合開発株式会社、株式会社ジェイコム東京北

能楽鑑賞会

司会・解説

講談 羽衣

講談師

神田蘭

能 羽衣

シテ(天女)……青木健一

ワキ(白龍)……殿田謙吉

笛……一噌隆之

小鼓……岡本はる奈

大鼓……國川純

太鼓……林雄一郎

後見……加藤眞悟

同……中村政裕

地謡……梅若泰志

同……加藤眞悟

同……長谷川晴彦

※配役は諸事情により一部変更になる場合があります。

演目のあらすじ

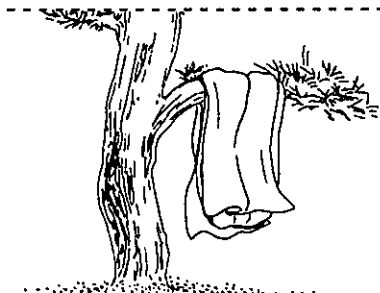
能 羽衣 (はごろも)



①駿河国三保の松原に住む漁師白龍が、釣りから帰ってくると、



②音楽が聞こえ、いい匂いがかしてきます。



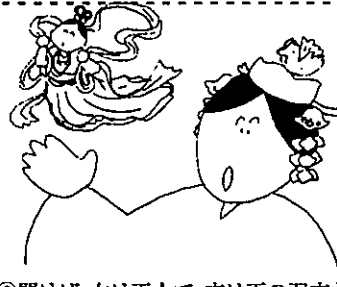
③見まわすと、一本の松に美しい衣が掛かっており、



④白龍は、家宝にしようと思い、衣を取ります。



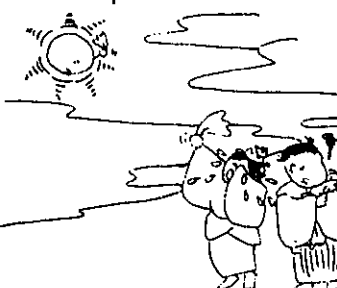
⑤すると、一人の女が呼びとめ、衣を返してほしいと頼みます。



⑥聞けば、女は天人で、衣は天の羽衣だと言い、



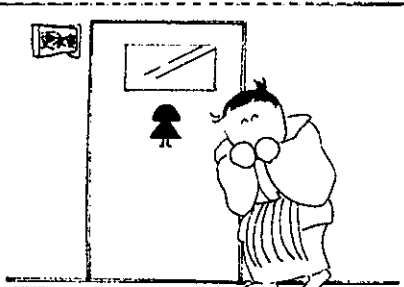
⑦白龍は、そんな珍しいものであることを喜び、ますます返そうとします。



⑧天人は、羽衣がなくては天に帰れないと悲しみ、



⑨あまりの哀れさに、白龍は、衣を返すかわりに、舞を見せてほしいと頼み、



⑩天人は喜んで承知し、羽衣をまとい、



⑪月世界の天女の生活の面白さや、三保の松原の景色を讚え、



⑫駿河舞をまいながら、天へと帰って行きます。

能について

夢の二刻の物語

能は演劇です。しかも現代でもその基本の形をほとんど変えずに、また時代時代に対応しながら伝承されている、世界で一番古い舞台芸術なのです。能の物語はおよそ二五〇話。そして、シテの役柄によつて大きく五つに分類されています。

初番目物(脇能物)
わきのうもの
神様がシテです。

二番目物(修羅物)
しゅらもの
戦で修羅道におちた武将の亡霊がシテです。

三番目物(鬘物)
かすらもの
源氏物語などのヒロインや、草木の精などの女がシテです。

四番目物(雑能)
ざつもの
他の分類に属さない能で、狂女や唐人などがシテとなります。

五番目物(切能)
きりもの
主に人間以外の鬼や天狗、妖精などがシテです。見た目の派手な曲が多くあります。

能楽について

役割 (能)

●シテ方の役割

シテ(主人公)

ツレ(シテの助演者)

後見(演者の手助けをする役)

地謡(合唱)

●ワキ方の役割

ワキ(シテの相手役)

ワキツレ(ワキの助演者)

●狂言方の役割

間(狂言)場面をつなぎ役

●囃子方の役割

笛

小鼓

大鼓

太鼓



囃子方の演奏姿

はやし かた えんそうすがた
みぎから 笛・小鼓・大鼓・太鼓の順に座ります。

能楽協会「学んでみよう能狂言」より

講談とは？

其の一

「講談」と「落語」はどう違うの？

「講談」「落語」は「ことあること」に比較されています。その違いは「体どこにあるの」でしょうか。簡単に言ってしまうと、「落語」が会話によつて成り立つ芸であるのに対し、「講談」は話を読む芸という言い方ができます。勿論読むといつても単なる朗読とは違い独特のしゃべり調子と小道具の使い方、展開される訳なのです。よく使われる小道具として有名なのが張り扇と釈台机です。張り扇で釈台を叩き、パンパンという音を響かせて調子良く語ります。この小道具を巧みに使った芸こそ「講談」ならではのものです。また「講談」は「落語」と比較して歴史が古く、奈良、平安の頃にその原型が見られます。但し一般に良く知られる「講談」の始まりは「太平記読み」とされています。食に困った浪人が老若男女を集めて「太平記」を面白おかしく読んで聞かせたというものです。これが「講談」のルーツです。

其の二

講談師、見てきたような嘘をつき。

パン、パン、パン、パン。

張り扇で釈台を叩き、調子良くメリハリをつけて語ります。「講談」は何よりもそのリズムが命です。リズムカルな話芸の妙味によつて、どんな荒唐無稽なお話でも嘘いつわりのない本当の出来事のように思わせてしまいます。「講談師見てきたような嘘をつき」「講談師扇で嘘を叩き出し」とは昔からよく使われる言葉です。嘘のことも本当にしてしまふ話芸のマジック。そこにこそ講談最大の魅力があるのです。

其の三

黄門様も講談が本家本元。

「この紋所が目に入らぬかー」今でもT.Vドラマで人気者の水戸黄門。もともと江戸時代に「黄門漫遊記」のタイトルが講談で扱われたことが人気を得たきっかけです。以来、実際には旅行などめつたにしない黄門様はスーパースターの道を歩き始めました。その他、大岡越前、国定忠治、柳生十兵衛、清水次郎長など映画、T.Vのヒーロー達の活躍も講談が生みの親と言えます。いわば講談は話の宝庫。一度高座をお聞きになれば話の収集家になれること間違いありません。

講談協会オフィシャルウェブサイトより

能舞台

能舞台は、もともと屋外に作られており、現在のように入った「能楽堂」という形になったのは明治以降のことです。

薪能・奉納能などに代表されるように、能は本来、何処でも上演が可能です。演目などによっては、本格的な舞台での上演が理想的である場合があります。

また、ホールでの上演では、ステージ上に仮設舞台を設置して上演します。

舞台は、客席に向かって大きく斜め前に張り出した形になった独特のもので、見所（観客席のこと）の位置によって、「正面」や「中正面」、「脇正面」などのブロックに分かれています。

・本舞台（舞台）

・地謡座

・後座（横板）

・橋掛り

の大きく四つの部分から出来ています。

